

## 非存在主義の妥当性 —プリーストを手がかりに—

水野隆志

私たちは日々様々なものごとについて考え、語り合っている。例えば、何かについて信じたり、想像したり、恐れたりすることがある。そして、その意識が向けられている何ものかは大きく分ければ、存在するものと存在しないものがあるといえる。自分の目の前に確かにいる人物のことを親しく感じることや、幽霊や妖怪といったよくわからないものに恐れを抱いていることがあるだろう。このように、私たちが何か意識を向けているとき、その何かは存在するものであるかもしくは存在しないものであることになる。しかし、哲学的には存在しないものと何らかの関係にたつということには様々な議論がある。特に論理学の世界では正しい論証をいかに行うかを明らかにするため、主に実在世界に関わるものを扱っている。したがって、存在しないものに関する論理は、無意味であるか偽であるとされている。それでも、日常的に存在しないものについて考えていることは明らかである。非存在について扱えるような論理学は無いだろうか。

存在しない対象を存在する対象と同様に扱おうとする理論としてマイノグ主義がある。しかし、この理論は後に有力な批判によって全く間違った論理として扱われてきた。プリーストはこれに反し、マイノグ主義を擁護し非存在主義という立場にたつて非存在について語ることを主張する。

そこで本論では、プリーストの立場に着目し、特に彼の『存在しないものに向かって：志向性の論理と形而上学』を中心とし、非存在主義を取り巻く議論について研究した。そのため、この理論を確立するための道具立てとしてのプリーストの世界意味論についてまとめた。そこでは、世界の範囲を開世界まで広げたモデルを与えることで、存在しない対象がそれらの世界のどこかで成り立っていると、非存在について語ることをできると主張していることを見た。

その後、プリーストが対立するクワインの立場と非存在主義を比較することでどちらに有用性があるかを検討した。その際、先行研究により、これらが両立する可能性を見た。この議論を踏まえ、日常生活における非存在対象を語ることについての重要性を確認し、世界意味論を用いた非存在主義がより妥当であると結論づけた。

(指導教員：横山幹子)